

第17回ヘブンアーティスト審査会 審査講評

東京都が指定した公園などの場所で音楽演奏やパフォーマンスを行うライセンスを交付するための審査、「ヘブンアーティスト審査会」も今回で17回目を迎えました。

応募総数パフォーマンス部門162組、音楽部門122組の計284組について、DVD に収録された映像資料等を基に一次審査を行いました。多くの審査委員が、映像を見て何らかの魅力や独創性、将来性を感じ、観客を前にした実演を見てみたいと評価したパフォーマンス部門40組、音楽部門21組の計61組のアーティストが、一次審査を通過しました。

二次審査として、一次審査通過アーティストに対し、実際に観客を前にした15分の実演を見て審査する、公開審査会を平成29年9月15日、16日、22日に池袋の東京芸術劇場の劇場前広場で行いました。

最終合格者は、別紙のとおりとなりますが、特に評価が高かったアーティストに対して、審査委員からは次のような意見が挙げられました。

パフォーマンス部門では、「マジシャンNoA」さんは、身近にあるCDを使ったマジックとジャグリングで、新しいマジックの模索が見えるオリジナリティを發揮し、ミスを帳消しにするほどの世界観とショーの構成が高く評価されました。「Circus Juggling Performer Kent.」さんは、直径15cmのボールを使ったトスジャグリングや一輪車を使った演目で、日々鍛錬を積んでいることが分かる基礎力の高さと芸の厚みがありました。また、華がありわくわくさせる魅力的な佇まいで、観客を魅了していました。「StickArtist KIA」さんは、デビルスティックを使ったジャグリングの高度な技からバランスアートに流れる構成で、短時間に編集された一次審査の映像資料だけでは分からなかった演技の内容を、バランスアートには条件の悪い風のある野外で短時間で完成させるという良い意味で裏切る展開を見せ、審査委員から高い評価を得ました。「かんばらけんた」さんは、体の特性を活かしたオリジナルダンスパフォーマンスが高く評価され、今後の先駆的な例として期待される存在になるという意見がありました。「Hiro & AG」さんは、パイプいすを使ってのダイナミックなアクロバットで、観る人をヒヤヒヤさせる緊張感と理屈なしの技の凄みで圧倒しました。どこでも間違いなく盛り上がる実力に、審査委員からも文句なしの声が上がりました。

その他、パフォーマンス部門の審査を通過したアーティストが評価された要素に「衣装や小道具など自分の世界観を表現するため、細部まで意識が行き届いている」「一次審査で観た映像資料より実演を見た方がかなり良かった」「エンターテインメント性が高く、ショーとして十分成立している」「テンポ良く、見ている人を飽きさせない」「パフォーマンスや合間のしゃべりの随所から、ユニークな空気感が醸し出されていた」といった意見が挙げられました。

音楽部門では、津軽三味線を若い二人がかきならす「桃響 futari」さんが高い評価を得ました。オ

オリジナル曲、定番曲、若者らしいロック調の曲など、様々な曲に対応できる技量と、若く爽やかなアピール力があるところが、外国からいらっしゃった方にも魅力的に映るだろうという意見がありました。「あさみちゆき」さんは、ギターの弾き語りで歌謡曲、演歌を披露しました。観客からのリクエストに応じ、途中の雨にも変わることなく堂々と演奏する姿は、場数を踏んでいることが感じられ、懐の深さと柔軟性が高く評価されました。

その他、音楽部門の審査を通過したアーティストが評価された要素に「観客を巻き込める」「十分聞かせて惹きつける魅力がある」「アンサンブルがうまく成立し相乗効果がでている」「自分の世界観を伝える力がある」「演奏レベルが高い」といった意見が挙げられました。

今回残念ながら二次審査を通過できなかったアーティストもそれぞれ魅力を持っているというのが、審査委員に共通している認識です。少しのところでは合否を分けているところがあり、実力が十分にありながら、公開審査の場では、練習・準備不足を露呈してしまったアーティストもいました。是非、再度チャレンジしていただきたいと思っています。

また、審査委員には、パフォーマンスの技術や演奏の技術に多少の未熟さがあっても、それを上回る魅力や将来性があれば良いと考える審査委員も多くいます。逆に言えば、技術が非常に高くとも、伝わってくるものが少なければ、なかなか評価につながっていかないということになります。技術も見るべきポイントではありますが、何が良いと思っているのか、何を伝えたいのかという、自身への問いに真摯に答えようとしていることが見て取れるアーティストが評価されています。

ヘブンアーティストには、非常に多岐にわたるジャンルのアーティストが雑多に混在しています。審査では、必ずしも同じ尺度だけで評価するのではなく、様々な種類の「はかり」を使って推し量る要素もあります。他にはないヘブンアーティストの多様性も審査には大切にしていることも、一つ加えたいと思います。

今回の審査講評は、ヘブンアーティスト審査会では初の試みになります。審査の基準がよく分からないというアーティスト、今後自分のどこを改善すればよいか分からないというアーティストに対して、今までになかった視点を与えることができれば幸いです。審査を通じて、関係するアーティストに少しでも成長してほしい、才能を伸ばしてほしいという思いを強くしました。

全てのアーティストに、今後のさらなる飛躍を期待します。

ヘブンアーティスト審査会

審査委員長 森 直実

審査委員（パフォーマンス部門） 芦部 玲奈、田中 未知子、乗越 たかお

（音楽部門） 梶 奈生子、湯浅 学